緑区 まちの変遷

緑区では、明治41年（1908年）に生糸を輸送する目的で現在のJR横浜線が開通したのをきっかけに、区域の都市形成が始まりました。

鉄道は鶴見川に沿って通され、開通と同時に中山駅と長津田駅が開業し、鉄道駅を中心に市街地が徐々に広がっていきました。

昭和30年代に入ると、高度経済成長により都市への人口集中が顕著となり、緑区でも丘陵地が造成され、中小規模の団地開発が始まりました。

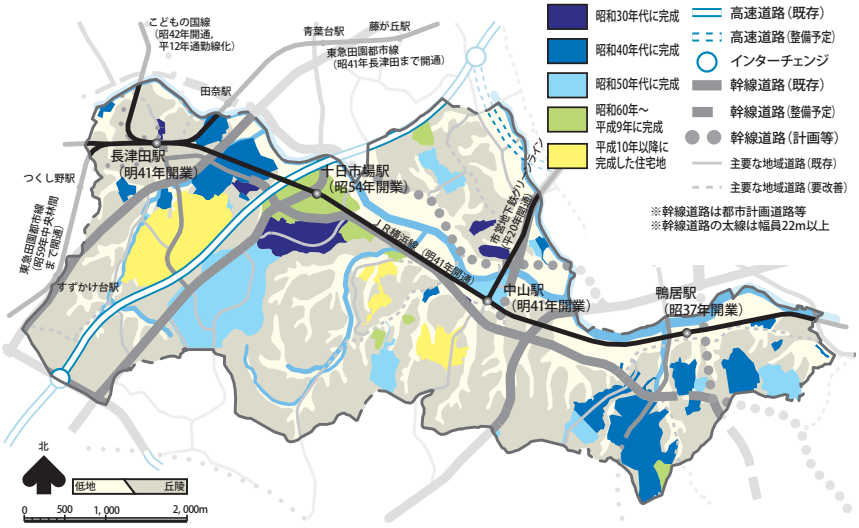
こうした中、昭和37年（1962年）に鴨居駅が地元住民の請願により開業しました。昭和40年代には大規模な土地区画整理事業などによって、さらに住宅市街地が広がっていきました。

周辺の土地区画整理事業に伴い、昭和54年（1979年）に十日市場駅が開業しました。近年においても長津田特定土地区画整理事業や、長津田駅北口地区第一種市街地再開発事業など、大規模な市街地整備が行われました。

こうした市街化の進展にともない、駅を中心として商店街が徐々に形成されていきました。また、昭和40年頃からは、上山町・青砥町・中山町の川沿いで工業集積が進み、都筑区の川向町・池辺町などとともに内陸工業地域の一端を担っていきました。昭和59年（1984年）には、横浜市が白山ハイテクパークを整備し、先端技術の研究開発企業を誘致しました。

一方、急激な市街地の拡大を受けて、昭和45年（1970年）に都市計画法による線引き（市街化区域と市街化調整区域の区分）が行われました。緑区においては、川沿いの農地一帯や丘陵地の農地及び樹林地一帯が市街化調整区域になりました。川沿いの市街化調整区域は、主に戦後の土地改良事業により良好な農地へと整備された場所です。鶴見川や恩田川の河川改修による治水機能の強化が行われ、氾濫による大きな水害もなくなりました。また、浜なしに代表される果樹園が広がるなど、都市農業が営まれてきました。

丘陵地の市街化調整区域では、谷戸や台地などにある農地の維持や自然を生かした大規模な公園の整備や市民の森の指定により、現在も自然豊かな環境が保全されています。



▲主な住宅開発の年代

出典：緑区まちづくり計画（平成26年２月）